

地エネが生んだ食の物語

編集委員 辻本一好

日々小論



兵庫五国の食文化は幅が広くて奥が深い。産物を育む風土と人の営みを表す「テロワール」の視点で掘り下げていくと、積み重なった歴史の地層で、地域の自然エネルギー「地エネ」を食に生かした人々の物語に出会うことがある。

その代表が、江戸時代における住吉川や夙川など六甲山麓の水車群と農産加工の勃興だ。拙著「ひょうご五国 食物語 ルーツをめぐるテロワール旅」でも詳しく紹介している。

急流から得る水の力を人々は菜種搾りに使い、照明用の油を各地に供給した。水車は小麦の製粉にも使われ、そうめんの技術と食文化がたつのなどで大きく花開き、「損保乃糸」といったブランドを生み出した。

日本酒は水車精米で江戸後期に大きく飛躍した。水力で今の純米酒並みによく磨かれた米が潤沢に得られるようになった

では高品質で大量生産の技術革新が進み、日本一の酒米と酒の産地であり続けている。

同じ瀬戸内海沿岸でも、恵まれた太陽のエネルギーで塩を作ることには情熱を注ぎ続けたのが赤穂の人々だ。広がる砂浜と潮の干満を利用した塩田開発で塩のトップブランドを確立した産地は、戦後は風の力を利用した新しい塩田へと転換する。

塩田の最終形とされる流下式は、竹の枝を重ねた高さ5、6段の枝条架に海水を流して風力と太陽の熱で水分を乾かし、従来型の20倍以上という生産性を誇った。国の政策で塩田は廃止されたが、兵庫県立赤穂海浜公園に復元されている。

自然の力をとことん生かそうとした施設は、日本人の感性と知恵の結晶だ。地球環境への負荷を減らす持続可能な地域デザインを子どもたちが考えるためのヒントになると思う。

左の記事を読んで、下の問いに答えましょう。

1 傍線部について、水の力を生かした水車群が生み出した産物を3つ書きましょう。

2 空欄に入る地名を漢字1字で書きましょう。

--

3 赤穂の塩は、広がる砂浜、潮の干潮という風土以外に、どんな「地域の自然エネルギー」を生かしていますか、2つ書きましょう。

NIEワークシートのこたえ（2025年2月3日公開）

◆ワークシート「自然の力と産業(社会)」

2025.2.3 朝刊 10面 解答

- 1 菜種油 そうめん(揖保乃糸) (日本)酒 (同意可 順不同)
- 2 灘
- 3 太陽 風 (同意可 順不同)